

2 建築武者修行のはじまり

2.1 ニューヨークでの戦い

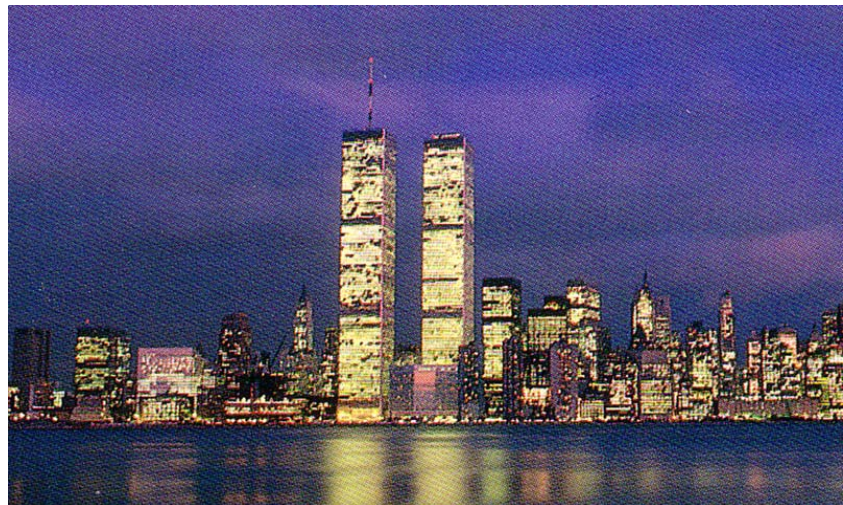
パークレーにもどると、ニューヨークに行く決心をしたことを、お世話になった方々に話してまわった。挨拶というより、そう言うことによって、自信のない自分にニューヨークへ行かせる決心をさせたのである。野村さん夫妻は“困ったときには神にお祈りしなさい、必ず救われます。”とってくれた。ニューヨークは遠い。日系人の多くの学生達は、ニューヨークへ行ったことがない。“犯罪が多い街だし、ニューヨーカーは人が違う。だまされない様に気をつけて、ガンバレヨ”と言って送ってくれた。

1971年8月12日、日本を出て4ヶ月が過ぎていた。

グレイハンドバスでアメリカ大陸横断をすることにした。旅費が安いこととアメリカ大陸を見たかったからである。アメリカ大陸は大きい。カリフォルニアからシエラネバダ山脈を越えると、モルモン教の教会だけがある様な街、ソルトレークシティ、インディアンが出てきそうな、赤土色の地形のシャイアンの街等を過ぎていく、そして、すべてが農地の様な緑の地平線が続く中西部、地形、地質、ランドスケープがどんどん変わる。大きな街にバスが停まると、1時間、2時間の休息がある。そのたびにバスからおりて私は街や建物を見て廻った。西部、中部そして東部の街々はまったく違う国々の様に感じられた。

ニュージャージー側からニューヨークに近づき、ワールドトレードセンターの2つのタワーが見えてきた時、感激した。あれが日系二世のミノル・ヤマザキが設計した、巨大な建築物である。戦後まもなく、彼はこのような建築物を設計するチャンスを得たのである。アメリカは偉大な国である。私にもチャンスはあるはずだと思った。ニューヨークに着いたのは8月15日、ちょうど終戦記念日であった。私のアメリカでの本当の戦いはこれから始まるのだ、と拳を握りしめた。4日3晩かけての直行のバスの旅の疲れも忘れていた。最初マンハッタンに着いた

バスターミナルが、どの辺に位置しているかわからず、近くの売店でマップを買って、歩いている人に“私はどこにいるのですか？”と尋ねた。不審そうな顔をしながら、安いホテル「YMCA」まで教えてくれた。そして、



マンハッタンにあったワールドトレードセンター、私の本当の戦いはここから始まった。

まずは住む所を探すことから始まった。教えてもらった、学生がよく集まるインターナショナルセンターという所に行き、ルームメイト求む欄を見て、電話をした。そのアパートに行ってみると、黒人であったので驚いたが、人もよさそうだったので、そのアパートの一室を借りることにした。



私の人生と建築の修行の場となったミッドマンハッタン

次の週から本格的に仕事さがしを始めた。ニューヨークには、世界一流の建築設計事務所が集まっている。特にミッドマンハッタン地域に集中している。「建築家」の欄の電話帳をコピーして、最も有名と思われる建築設計事務所のアイ・エム・ペイや、SOMの事務所から訪ね

てまわった。日本ではとても考えられない様な、有名な事務所に仕事をさがしに来たのである。こんな有名な事務所には、世界から若い建築家が腕を磨く為、そして職を求めて、毎日のように訪れるのであろう。私の様に満足に英語も話せない者に、簡単に面接をしてくれるわけがないと思ったが、やるしかないと思った。

電話帳をコピーして、毎日作品集とレジメを持って、建築設計事務所を一軒、一軒まわった。ニューヨークもカリフォルニアと同じ様に不況で、どこの事務所でも受付の対応は同じであった。「今は、うちでは、建築家やドラフトマンの求人はいしていない」と断られた。有名な設計事務所は、ロビーがきれいにデザインされているだけでなく、受付に座る秘書の女性も大変綺麗だった。これもデザインのひとつかと思った。

地下鉄に乗り、碁盤の目のようなニューヨークの街をくまなく歩いた。1ヶ月で100軒近くの事務所を訪ねた。実際は99軒の事務所を訪ねたが面接してもらえたのは、数える程であった。ニューヨークにはもっと沢山の建築設計事務所があるのだが、100軒目の事務所を訪ねると100%という感じで、もういくら訪ねてまわっても、雇ってもらえる可能性がなくなってしまう気がして、恐ろしくなった。碁盤の目のようなマンハッタンの街を歩いてまわるのも、肉体的にも精神的にも疲れた。

何をやる気にもなれず1%のチャンスを残して、次はどうしようかと考えて、毎日アパートのベッドに横たわっていた。金銭的にも底がついてきたし、B2のビザももうすぐきれてしまう。恰好よく日本を飛び立ってきたが、まだ何も建築の仕事をしていない。建物だけを見て帰るわけにもいかない。建築の仕事のチャンスを待ってマンハッタンの日本のレ



ここも私の人生と建築の修行の場となったロウマンハットン

ストランで食いつなぎやビザの為に働くとなると、私の夢はすべて消えてしまう気がした。絶望的な日々が続いた。アメリカに来たのが間違いだったのかとも思った。日本で努力するほうが報われるよ、言われた言葉を思い出した。こんなはずではなかった。神は私にどんな道を与えてくれるのだろうかとも思った。それ

から一週間程して、ある事務

所から電話があり、“来週から働けるか？”という、嬉しい知らせがあった。本当に飛び上がって喜んだ。“ヤッター！”この時は本当に嬉しかった。

その事務所は、50年以上もの歴史を持つ、ウォンク・アダムス・スレービンという、中規模の設計事務所であった。アメリカで初めての仕事である。製図板に向かって座って、線を引こうと思っても手が震えて、思う様に描けない。自分で一番好きな仕事を、6ヶ月近くもしたくても出来ないでいたのだ。嬉しくて涙が出た。早口でいろいろ説明されて、図面を描くわけであるが、イエス、イエスと答えたが、その英語がまったく理解出来なかった。もう一度ゆっくり話して説明してくれる様お願いした。上司は苦笑いをしながら親切に教えてくれた。ニューヨークでの生活が始まった。ビザも延長したし、夜の英語学校にも通い始めた。